

Title	海から陸への飛躍：岩崎・大隈・福沢
Sub Title	
Author	佐藤, 能丸(Sato, Yoshimaru)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2003
Jtitle	近代日本研究 No.20 (2003.) ,p.77- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	『福澤諭吉書簡集』完成記念講演録
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20030000-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第二十卷（二〇〇三年）

『福澤諭吉書簡集』完成記念講演録

海から陸への飛躍

——岩崎・大隈・福沢——

佐藤能丸

『福澤諭吉書簡集』の完結

佐藤でございます。

坂井達朗さんから、何か話そうにとご下命があったのが夏休みに入った頃だったと思いますが、外堀を既にずいぶん埋められていましたので、どうしても話さざるを得ないことになったわけです。

前もってレジュメをお配りしてあると思いますが、実は今日の話は目新しいものではありません。この度完結いたしました『福澤諭吉書簡集』（後出は『書簡集』と略す）を改めて自分の関心のある所を拾い読みしましたところ、やっぱりこの『書簡集』はすごいなと思わざるを得ないことになりました。

と申しますのは、この『書簡集』の中で私が大学院の頃にちょっと調べたことがあります。その時期に比べると、何とまあ、今度の『書簡集』は微に入り細に入り、今までよくわからなかったことがより一層鮮明になったのかという思いを強くしたわけです。

それで、そんなことに限定した話ぐらいでよろしゅうございますかと、坂井先生に申し上げましたら、それでよいのだ、ということでした。今日の話は大きな福沢の像とか、あるいは、明治前半期の政治状況とか思想というものではありません。書簡の中に記されているある事件について——事件と言っていると思いますが、そのことについて話すわけです。

今度の『書簡集』は、ほんの拾い読みの中から感じたことですが、何といっても、近代日本の基礎資料として共有財産になるなあという思いを強くしました。収録されている書簡が全部で二千五百六十四通ということでした、今までの岩波の『福澤論吉全集』に収録の書簡は確か二千百三十通ということを知っていました。今度是非常に多くお集めになった。私も全集、著作集を幾つか手掛けたことがありますが、書簡を集めることほど厄介なことはないです。一通の書簡を集めるのにどれだけ苦労するか。この度の福澤研究センターを始めとして、これに参画された方々のご苦労は多少わかるからです。

この度の『書簡集』は、全集の二千百三十通に四百五十通近くもプラスしたわけですが、活字になっているものも原典をもう一回確認して、原典の例のクニヤクニヤの文字、福沢の直筆をまたゼロに返してもう一度解読し直したということですから、今まで公表されている活字のものをそのままパッと今度の『書簡集』に入れたわけではない。またゼロからもう一回解読し直すということは大変な作業です。したがって今まで解読されていた字が、実はこの字が正しいのだと訂正されています。しかも、普通は、変体仮名とか平仮名の表記を片

仮名でも平仮名に直したり、変体仮名も普通の平仮名に直したりするわけですが、今度の『書簡集』は、福沢の肉声といえますか、肉筆といえますか、片仮名とか独特なものではできるだけ字を移さないで、そのまま再現しているんです。ですから、福沢の、その宛名人に与えた、その時の感情が非常に鮮やかに我々に伝わってくる。これはすごい見識のもとで今度の仕事がなされたわけで、驚きと共に大変敬服している次第です。

こういう極めて特筆すべき編集の姿勢が随所に出ているわけです。

そういう中から、我々は『書簡集』からさまざまな読み込みの可能性というものを与えられたような気がします。そして、この度の収録二千五百六十四通の中から、たった二十一通——この二十一通というののはものすごく大きな意味を持っているのですが——のみを抽出して、一つの事件の解明をちよっと試みてみたいというわけです。

「高島炭鉱」 讓渡関係書簡二十一通

三菱、あの財閥の「三菱」の形成の基礎を築くその源になったのが、海運業から出発していった岩崎弥太郎が、海から陸へ上がって、あの大三菱を育成する。その大きな、大きな梃子になったのが、実は「高島炭鉱」です。長崎県の海に浮かんでいる小さな島ですが、その「高島炭鉱」を手に入れて、海から陸へ大飛躍するようになった。その「高島炭鉱」を手に入れるときに、実は福沢が大変大きな役割を果たした。そのことが、今回の『書簡集』の中で非常にはっきりしてきたということです。結論から言いますと、ただそれだけです。福沢の二十一通の「高島炭鉱」讓渡関係の書簡が収録されていますが、実はこの二十一通の内、今までの

『福澤諭吉全集』にあったのはたったの七通だったのです。この度の『書簡集』に十四通も関連の書簡が収録されたために、より一層あの時に福沢が果たした役割がはっきりしてきた。そういうことです。

それは福沢の書簡から三菱の岩崎弥太郎、弟の弥之助、そしてその間を取り持つというか、役目柄だった政府の高官としての大隈重信の存在。そういうことがずいぶんはっきりと垣間見ることができて、「三菱」の創業の黎明期の経緯が福沢の書簡を通して明らかになったのではないか、ということです。

「三菱」に「高島炭鉱」が移ることになりますが、前の所有者は、弥太郎、弥之助と同郷の土佐出身の後藤象二郎です。後藤がにっちもさっちも行かなくなって、借金だらけになっている。その身動きがとれないときに、福沢がその間に立って、「高島炭鉱」を「三菱」のほうに譲渡することに大きな橋渡しをしたのです。

「高島炭鉱」は実は昭和六十一（一九八六）年十一月に閉山いたしました。閉山を契機にして三菱の関係者によって三年後に『高島炭鉱史』という大変大きな本が出されています。その経緯はそこにも詳しく記されていますが、きょうは専ら福沢の書簡から見ようと思います。

「高島炭鉱」の沿革

高島炭鉱の起源はいろんな本を読んでもはっきりわからないようです。言い伝えによりますと、一七〇四（一七一〇）年の江戸中期の宝永年間に肥前平戸の領民の五平太という者が深堀村より渡って開鉱採掘して、近くの塩田のエネルギー源としたということです。確証は無いようです。高野江基太郎の『日本炭鉱誌』（一九〇八年）とか、農商務省鉱山局の『本邦重要鉱山要覧』（一九一四年）などに記されているわけです。やがて

下って江戸の末期になりますと、文化年間（二八〇四―一八一七年）の末頃に佐賀藩の鍋島家の所有に帰しました。実際には佐賀鍋島家の支藩がこれを司ったわけです。掘られた石炭の多くは四国とか中国地方の沿岸地に塩田用として供給されたと言われております。

そして、幕末から明治維新に移りますが、明治元（一八六八）年に鍋島直大は家臣の松林源蔵に命じてイギリス人のグラバーと共同せしめる。そしてお雇い外国人の鉱山技師のモリスなどを呼んで、初めて西洋式の方法で、大変深い堅坑の開鑿に成功し、開発を進めます。

つまり、高島炭鉱はこうした時期にイギリスのグラバーに代表されるように、イギリス資本の参加によって雄藩である鍋島家の殖産興業政策の一環として行われたわけです。そしてこの頃から、その石炭は、外国船の需要に対応しての貿易品として供給されていきました。

ところが明治維新政府はいろいろと資源のことについての法令の整備に着手します。一八七三（明治六）年に「日本坑法」で従来の鉱山、その他の鉱業の規則が改定されて、鉱物関係事項が総て政府の工部省の管轄下に置かれる。廃藩置県後の各旧藩のものが政府の下に集められるということで官営となるわけですが、工部省の高島鉱山支庁の下に置かれます。しかし官に接収されても、すぐその年に官有物の払い下げということ、後藤象二郎の経営しておりました蓬萊社に五十五万円という価格で払い下げられます。

しかし「士族の商法」というのでしょうか、後藤経営の下ではいろいろと手立てをしたのですが、蓬萊社の各種の事業が失敗して、負債が大変累積しました。そういうことを友人として耳にした福沢のいよいよ出番となる。ということが一八七八（明治十二）年の秋、十月十二日だということが、今度の『書簡集』でわかりますが、一八七八年の秋に福沢が熱心な仲介者となって、三菱の岩崎弥太郎に譲渡するということに乗り出すわ

けです。そして一八八一（明治十四）年の三月に岩崎が、後藤の負債を肩代わりする条件で、ついに三菱の経営に移るわけです。その経営に移る経緯が今日の話の中身です。

弥太郎の弟弥之助の奥さんの父親が後藤象二郎ですから、後藤は弥之助にとっては岳父ですので、とりわけ深いつながりがあるということが、実はこの背景にあるわけです。婿殿である弥之助は、後藤のために積極的に、この譲渡話に取り組みます。

後藤から三菱に移った高島炭鉱は、いろんな器械を増設して事業の近代化を図ります。改良と拡張を進めて、一八八九（明治二十二年）年には、いろんな所に坑道を新開します。そして、手に入れてわずか五、六年の間に三菱の「ドル箱」事業になっていく。そして「ドル箱」事業になることによって、海運から陸への大三菱へ飛躍する。そういう契機になったのが、この高島炭鉱です。

レジュメに参考文献等を掲げましたが、今日の話は、結局は私のオリジナルということまでは行っておりません。実は岩崎家伝記刊行会で出されて、実際には中野忠明先生がご執筆された『岩崎弥太郎伝』（一九六七年）、『岩崎弥之助伝』（一九七一年）。それから、我々が大学院のときにはまだ出ておりませんでした。膨大な『三菱社誌』（一九八〇年）が三菱社誌刊行会から刊行されました。脇村義太郎先生が代表者となって『三菱社誌』が出て、ようやくその経緯が明らかになったわけです。恐らく、『三菱社誌』が出るまでは三菱関係の研究というのはずいぶん制約があったのではないかと思います。この社史が出たためにいろいろなことを研究することが非常に容易になったような気がいたします。ですから、今日は、中野先生とか、さまざまな人たちの研究に依拠して話をする、というわけです。

福沢、岩崎弥太郎・弥之助、後藤象二郎、大隈重信

福沢と岩崎弥太郎・弥之助、大隈重信、そして後藤象二郎との簡単な関係に触れざるを得ません。極々簡単に申し上げます。

岩崎弥太郎は、ご存じのように土佐出身で、武士として活躍するわけですが、明治維新の後に実業界に転じます。つまり藩士として土佐藩のいろんな物産関係の仕事をしており、幕末に土佐藩の開成館の長崎出張所に勤めます。やがて開成館の大阪出張所に転任し、商業活動をするわけです。明治維新に伴い、その出張所が大阪商会という形で藩から切り離されて九十九商会に転じます。そして、その九十九商会が三川商会と名を改めて、それが三菱商会、三菱汽船会社、そして一八七五（明治八）年九月に、郵便汽船三菱会社と改称され、国内最大の汽船会社に成長していく。ですから、藩の仕事がやがて岩崎の個人の仕事になっていくのですが、そういう過程において、実は同じ藩士の後藤象二郎とも非常に親しい仲でありました。

先般、岩崎弥太郎の明治初期の日記というものが公刊されましたけれども、それを見ると随所に、後藤と行動を共にしたり、あるいは木戸孝允とか、伊藤博文ら長州の人たちとの交流などが書かれています。ですから、弥太郎・弥之助、そして後藤は旧知の仲であるということ、何も炭鉱を譲渡されるときに知り合ったわけではない。そういうことが背景にあります。弥之助は、弥太郎の弟ですが、ずいぶん歳が離れていて弥太郎とは十七歳も違います。やがて弥太郎が亡くなった後に三菱を引っ張って、大きく大きく飛躍に導きます。弥太郎の嗣子である久弥が、まだ年少のために叔父さんである弥之助が後見人として取り仕切るという関係があ

ったわけですよ。

後藤象二郎は、ご存じのように明治維新の立役者です。藩主の山内容堂に、將軍徳川慶喜に政權を返上させるといふ、大政奉還の道筋をつけた人であります。明治政府に用いられましたが、一八七三（明治六）年の征韓論で板垣退助、副島種臣らと共に下野いたしました。一八七四（明治七）年に有名な「民選議院設立建白書」を提出しました。ちょうど政治活動の真つ盛りでした。つまり自由民権運動の指導者として政治活動を展開していましたが、どうしても政治活動のために資金が必要ということで蓬萊社等の事業に手を出したわけです。それが資本金すらも思うように十分に集まらない。そして、外国資本とも提携していて、どんどん負債が膨らんでしまう。これを見かねて、後藤の才に非常に注目している勝海舟らは、無血の形で徳川家が損なわれることなく無事に大政奉還したのは、何とんでも後藤らがあのような献策で王政復古への道筋を立てたからだと彼を評価して、徳川家に、後藤を何とか救うようにと、いろんなことをしたそうですが、余りにもその負債が多額なために、ついに徳川家も動くことすらできなかったと言われる。そういうときにこの三菱への譲渡の話が具体化したわけです。

一方、その当時官にあつたもう一人の人物が、大隈重信です。大隈と福沢は明治維新の後の廃藩置県の前、一八七一（明治四）年の前後に初めて会つたと言われているのですが、はっきりした年月はわかりません。しかし、できる者はできる者を評価できるのでしょうね。大隈も福沢も大変な見識の持ち主ですから、お互いに、どうも佐賀出身で生意気なやつがいるようだ、何か三田の聖人とか言われてすぐ世論をリードしているやつがいる、だけど何となく気に入らない。お互いに背中合わせのような形だったのが、あるときの会合ですっかり意気投合して、福沢が亡くなるまで終生仲がよかったということです。

福沢がひよいひよいと早稲田の大隈邸に出かけて、一番奥の誰をも通さないような座敷で綾子夫人のお酌で深夜遅くまで天下国家を論じたことが何回あったか数えきれないほどだと言われるぐらいに、二人の気持ちは非常に一致していた。ということは、これからの日本の近代化、あるいは政治のシステム等々について、福沢と大隈の視点、方向性が非常に一致していた。福沢と大隈とは好対照で個性がずいぶん違うのだけれども、ウマが合ったということは両雄にとって非常によかったのではないかと思います。

一八七七（明治十）年の西南戦争時に、まず病氣であった木戸孝允が、西郷、いいかげんにせんか、いいかげんにせんかと、うわ言のように言いながら病歿する。そして西郷が城山の露と消える。西南戦争の直後に今度は大久保利通がテロリストによって暗殺される。即ち、維新の三傑が相次いで亡くなるわけです。つまり、その後は、いわば維新の功労者の弟分といえますか、その二番手の人たちが政府のトップを占めてくる。形としては三条実美太政大臣、あるいは左大臣の有栖川宮、右大臣の岩倉具視ということですが、岩倉は大変な政治家ですが、実質的には参議という閣僚たちが政治の実権を握っている。そして、参議の中で大隈がダントツであったと言われています。また、伊藤博文と井上馨、そして大隈が政府部内の武官派ではない文官で、これがトリオとして非常に進歩的な思想の持ち主であったわけです。伊藤と井上と一人でこそ大隈に勝ちがたけれ、伊藤、井上二人相合して大隈をようやく凌駕するを得たりと。そのぐらいの力関係だったと言われています。

とにかく大隈というのはその頃までは極めて尊大で、人の意見も聞かないし、恐らく、今で言うならば「上司にしたいくない」ナンバーワンだったのではないでしょう。それほど大隈の明治の前半期の個性というものは非常に才気煥発でそれをふんぷんとさせ、人の話が終わるまで聞かないで、ちよっとぐらいのところでも

うわかった、お前の言っているのは駄目なんだというような形。そのような姿勢をふんぷんとさせていて非常に嫌がられていたそうでございます。それを見かねた友人の五代友厚は、大隈を諫める文言五カ条を手紙にしたためていたほどです。ですから五代がいろんな手紙を大隈に出すときに、さて大隈君よ、かねての五カ条ゆめゆめ忘れまじく候と、いつも注意していたそうです。明治中期を境にして大隈は自己変革というか、だんだん角が取れて、晩年には国民政治家、大衆政治家と言われるぐらいにずいぶん変わるわけでした、若い時から接していた徳富蘇峰は、一人の人間というものがこんなにも変わるものかということを書懐しております。即ち、当時飛ぶ鳥を射落とすような力を有していたのが実は大隈だというわけです。その大隈が当時は参議で、この譲渡の話が出た頃は、大蔵卿だった。つまり政府の台所は大隈の手に委ねられていた。その大隈に福沢がいろいろと取りなしをお願いするというわけで、福沢、そして弥太郎・弥之助、大隈重信、そして後藤象二郎という役者が非常に揃っていたということが言えると思います。

福沢の「いらさるお世話」

まず一通目です。

(一)の書簡『書簡集』三六、これは山東直砥に宛てた一八七九(明治十二)年八月十五日付の福沢の書簡です。書簡に見る限り、福沢がこのことに参画するのはこの辺りからですが、実際にはもう少し前から、ちょうど山東に手紙を出す十カ月ほど前、一八七八(明治十二)年十月頃から動いていたことが、二番目の書簡三八でわかります。

(1) では、まだ「高島炭鉱」という名で具体的には出ておりません。山東という人はどういう人間であるかという、慶應に直接関係がある人物ではありません。和歌山、紀州の出身でして、紀州というと陸奥宗光の系統になるわけです。山東は戊辰戦争に参画して、やがて函館に行ってロシア語を学んだり、樺太の改革の急務を説くなどという警世的な姿勢をも示していたそうです。そして一八六九(明治二)年に東京早稲田に北門社という小さな学校ができて、その管理を委ねられた。今、早稲田大学のある辺りです。さらに、一八七(明治四)年に神奈川県参事に転じ、西南戦争に際しては土佐派の人々と相通じて西郷軍と行動を共にしたという形で、陸奥宗光たちと政府転覆計画という、いわゆる土佐派の拳兵事件に山東も多少関わりますが、このときにはわずかに罪を逃れることができた。そして、そういう後に高島炭鉱の三菱への譲渡について仲介の労を取るということになったわけです。福沢は一八七七(明治十)年頃からご自身の知名の名簿といいますが、住所録のような名簿を持っています、その中に早くも山東の名前が記されています。そういう山東に対して福沢が手紙を出したのが(1)です。

「後藤先生も」というのは後藤象二郎です。「後藤先生も、帰京後腸胃病之由」、つまり胃腸病、消化器がよくない。「于今面会不致」、まだ会う機会はない。そして、長崎の模様はどうですか、ということ。『某礦之炭を元価を切て売払、為ニ御迷惑之由、実ニ驚人候始末なり。何とか工夫不致而ハ不叶事ト奉存候』。この「某礦」というのが高島炭鉱のことです、どうも高島炭鉱の経営というものは、その元値を切って売り払うというような形で非常に経営がうまくいっていない、困ったものだ、何とか工夫しなくてはこれから立ち行かないのではないか、ということがこの書簡から伺うことができます。やがて、こういう経緯の後に、今度はどのような展開になってくるかということです。

(2)の同年十月七日付の書簡^{三四}に移っていきます。今度は莊田平五郎に対しての書簡で、より具体的にやってきていることが伺えます。

莊田平五郎はご存じのように、福沢の高弟でして、福沢の生涯にわたって大変信任が厚かった人だと言われている。福沢の片腕、両腕のような役割を果たした人だと聞いております。

この莊田に福沢が、いわば中心になるような形で尽力をお願いするのが(2)の書簡です。なにしろ莊田は、一八七一(明治四)年に慶應の教員となって、翌年からは塾長を務める。そういう大幹部ですけれども、やがて彼は義塾の大阪の分校に行き、そして京都の義塾の設立にも奔走するなど、義塾の発展のために非常に尽くしました。やがて一八七五(明治八)年に三菱商會に翻訳係として入社します。非常に岩崎の信任が厚く、二年後には三菱会社の社則、あるいは郵便汽船三菱会社の簿記法という、そういう経営のノウハウを確立することに功労を尽くします。また、弥太郎の姪の藤岡田鶴という人と結婚します。ですから岩崎家とは縁戚関係にあるわけです。当初は義塾にいましたが、義塾から外に出たあとも、福沢が亡くなるまで塾外におけるもつとも信頼すべき人であったことが、書簡、あるいは伝記などからも垣間見ることができます。つまり、こういうような形で莊田が、仲介の労をとることになるわけですし、これが(2)の書簡です。

「後藤氏炭礦之一条、昨年十月之頃、小生が三菱石川氏へ内話いたし候義も有之」、昨年十月ですから一八七八(明治十二)年の十月から、もう福沢が動いていたことがこの書簡によって確認されるわけです。そしてそういう話をした。しかし、「其節ハ頓ト纏リ不申」、何ら埒が明かなかった。そして「今日ニ至リし事なり」と。ちょうど一年後の十月からこの動きが具体化する。その動きの具体化のまず一つの手始めとしたのだでしょう。自分の門下生である莊田に動いてもらう。まだまだトップの弥太郎のところにはそういう話をということ

ではなくて、まず自分の息のかかったといひますか、影響力のある門下生莊田を通じて、その話を持つて行くという極めて用意周到なやり方です。

「生ハ」、自分は、「初より高島礦ハ三菱之所有ニいたし、後藤も三菱も共ニ便利ならんとの考ニ而、今日迄も其説を変したることなし」。つまり後藤の借金まみれ、それを三菱が引き受けること、それは大変便利なことで、どちらも万事目出度しということと、「今日迄も其説を変したることなし」と。これはすごい確信と洞察力とも言ふべきで、非常に珍しいぐらゐに、この譲渡の話に福沢が駆り立てられているわけです。そして、この一年間にいろんな行き違ひがあつたようだ。いかにも残念だ。何とかしてこれを打開してみたい、と。

「尚又昨今炭礦之事情を聞くニ、或ハ此節なれば、首尾能可参哉之見込なきニあらず」。炭鉱という、石炭というものの需要等々を考えるならば、これは大変有望なものである。ですから、「就而ハ現今三菱社之模様如何」。三菱社の岩崎弥太郎を中心として、この炭鉱に対しては幾らか触手があるのかどうなのか、様子はどうか。そして「若しも御勘考之上、之を試みんとの思召あらば、御相談如何可有之哉」。もし前向きであつたならば相談を是非したいものだ。「此事成れハ三菱之利害ハ姑く聞き」、三菱の利害はしばらく置きというのは、ずいぶん乱暴な言い方ですが、「国之為ニも大ニ体面を保護する之訳ケ、英一」、「英一」というのはジャーディ・マディソンのイギリス一番館です。そして、実はこの裏にはいろいろとトラブルがあつて訴訟等が起きてゐるわけです。そういうようなことも円満に解決、打開されるだろう。ですから、「右内々申上度、若しこれを試みんとの思召あらば、何日ニ而も、御退社之時刻を拙宅へ御来車を煩はし度」、この事について莊田さん、あんたが前向きならば、退社のときに私の自宅に来ていただいて、このことを実は相談申し上げたいんだ。その時に詳しく私は言うつもりだ、と。

ところが付記に、「尚以、本文ハ唯試ニ申上候迄なり。其事ニ付思召なくバ、固より御来訪を煩ハすニ及はざる事ニ御座候。為念申上置候」。「其事ニ付思召しなくバ」と書いても、福沢と莊田とのあの信頼関係の磐石なことから言うと、これは恩師の福沢先生には並々ならざる意の決するところがある、等閑に付するということとはゆめゆめ考えられない、というわけで、すぐさま莊田は行動を開始するわけです。

福沢が十月七日付で手紙を出しますと、莊田はもうその直後にやって参ります。やって来たのが十月九日ですから、手紙を頂いて二日後には莊田は福沢邸に馳せ参じる。馳せ参じてくれたその直後の十日付でお礼のようなつもりで出したのが(3) 三六の手紙です。

「先夜ハ御来訪被下、難有奉存候。其節御内話之一条、何とかして双方之為ニ相調ひ候様いたし度」、何とか後藤のほうも三菱のほうもうまくいってもらいたいものだとこのことです。「就而爰ニ一事相願度ハ」、大變願いたいことは、「仁兄」莊田さん、あなたから「仁兄より岩崎君へ——弥太郎を指します——何となく御尋被下度」、どうかその意のあるところを探ってくれ。そういうことなんです。「其趣意を、福沢論吉事」、福沢は、自分はこう思っている、「炭礦之義ニ付一寸御話申度事有之、御面談可被下哉」、どうか会ってくださいませんか。「或ハ炭礦之事ニ付而ハ、何様之場合ニ而も断して人之言を聞かす」、どんな人であろうと炭鉱の事についてはおれは人の言を聞かない、たとえ福沢さんでも。そして「又人ニ語らずと申訳か。夫レならば夫レニ而論吉も面談も求めず。或ハ然らずして、事と品ニ由りてハ語るも亦妨なしとの意ならば」、そういう気持ちを持っているならば、やはり会いましょう。そうであるならば、ある日を定めて「何れ之場所ニ而も」、その場所を知らせてくれるならば、私はすぐさま馳せ参じましょう、と。

そしてまた、こういう言い方は心憎いんです。「小生も実を申せハいらざる御世話なれ共、近来之事情双方

共ニ損して益なし。お互ニ宝を抱て其用を為さゝるもの、如し。余り馬鹿らしく存し候より、一寸口を出さんと欲するのミ」、これはずいぶん人の心をくすぐるようなもので、福沢のこういう言い回しにその人柄が出ているんですね。「小生も実を申せはいらざる御世話」、だけどお世話しちゃっているわけです。つまり、この「お世話」ということが、実は単なる節介ではなくて日本の近代化、産業革命のいわば大きな端緒になることと結びつく、ということが、この福沢の「いらざる御世話」なんです。

「お互ニ宝を抱て」、つまり後藤という大変有能な人物、企業人として高く評価している弥太郎。そういうものを「お互いニ宝」という形で、後藤、そして三菱が十分に機能しないということは国家の大変な損失である。「余り馬鹿らしく存し候より、一寸口を出さんと欲するのミ」。これは福沢のなかなかうまいレトリックといえますか、非常に人の心を動かしてしまふということが、こういう書簡の中から垣間見ることが出来ます。つまり、譲渡問題について弥太郎との面談の実現の斡旋を莊田に依頼したわけです。

岩崎弥太郎との面談

その結果、十月二十八日に弥太郎との面談が実現するわけです。面談実現の翌日に弥太郎宛に出したのが十月二十九日付の手紙の（４）四〇〇です。ここの辺りから非常に進展するわけです。

「拝啓 昨日ハ早朝を拝趨、御用繁之處御妨仕、恐縮ニ不堪」、昨日は朝からお会いすることができて、大変忙しいのに、そのお忙しいのをより一層妨げてしまった。大変恐縮しております、ということなんです。そして「御熟考ニも可相成由」、では考えてみましょう。そういう返事をそのとき頂いたわけです。

ですから「難有奉存候。実ハ此一事極テ困難、或ハ小生ヨリ御話致候テモ、一言ノ下ニ御謝絶モアラン歟ト」、もう断られるだろうと。「疑懼致居候処、無其儀、旧ヲ懷ヒ今ヲ察シテ、御勘考ニモ可相成トハ、小生ニ於テモ望外ノ仕合、別而感佩仕候」。非常に前向きで、非常に自分は嬉しいんだという、そのお礼をしているわけです。そして「第一既に已ニ御大業ニ従事ノ上、更ニ之ニ加ルニ他ノ一大業ヲ以テス」。今、海運で非常に隆盛しているのに、更にその大きな事業の上にもう一つ大きな事業を加える。そういう形で非常に持ち上げているわけです。

「如何セン今日ニ至リ、後藤君ノ後藤君タル体面ヲ全シテ、今ノ社会ニ求テ得ベカラズ、作テ造ル可ラザル一人物ヲ保存スルノ路ハ、他ニ求ム可ラズ、唯老台——岩崎弥太郎——ノ一諾ニ存ルノミ」。つまり、後藤は非常なる借金でもう身動きができない。しかし後藤という人物はものすごく大事な人間なんだ、と。「今ノ社会ニ求テ得ベカラズ、作テ造ル可ラザル一人物ヲ保存スルノ路ハ」、彼を維持させていくのは、まさに「他ニ求ム可ラズ、唯老台ノ一諾ニ存ルノミ」。

どうか後藤の負債を、弥太郎さん、何とか救ってあげてくださいという形で非常に力説するわけです。このことは昨日の朝に話したことに当然同じだと思うのですが、重ねてまた次の日の手紙でこうやって畳みかける。このプラス、プラスというような形が見事にこういう書簡に出ております。

「天地間ニ一個ノ後藤君ヲ消滅スルノミ」。もしここで後藤が窮まって社会から抹殺せられるような不幸な結果になれば、「天地間ニ一個ノ後藤君ヲ消滅スルノミ。去迎ハ又世ノ為メ人ノ為メニ惜シム可シ。同君ノ天稟、商業ニハ不適當ナレトモ」、つまり、士族の商法で経営者としては不適當だ、そういう才ではない。そういうことを言っています。「商業ニハ不適當ナレトモ、人品ノ清貴磊落ニシテ、正ニ今ノ社会ノ大事ニ適ス可キハ、

朝野ノ評シテ疑ヲ容レサル所、惜シム可キニ非スヤ」。後藤に対する大變な評価の高さと惚れ込みようが、ここに出ているわけです。

「尚且国ヲ思ヘバ、入ラザル事ニ厚顔ヲ忍テ、今回ノ御話モ致候次第」。自分はあまりこういったことをしないだけども、敢えて嘴を入れさせてもらうということなんです。「何卒私ノ為メ公ノ為メニ、御英斷奉願候。此義ニ付小生ハ人ニ語ラズ、又人ノ言ヲ聞カズ。唯一個ノ中心ニ出タルモノニシテ、固ヨリ名利ノ外ニ在ルハ、乍憚老台ニモ御涼察ノ事ナラン」。そんな私心というものがあつたわけではない。そういう自分の心情というものはあなたも十分承知のはずだ。こういうような言い方で、そして、これがもし実現しないとどういうことになるか。「後藤君ノ地位体面ヲ失フ事モアラバ、其時ニハ少シク怨望セサルヲ得ズ。蓋シ此怨ハ私怨ニ非シテ公怨ナリ」。これはすごく品のいい脅かしのような気がいたします。これ、うまいですね。もしあなたが後藤さんを救わなかつたら、もう私は怨望、怨みますよ。これは私の私的な怨みではなくて、天下国家の公の怨みになりますよ。こういうふうにして畳みかける。これは品のいい脅しでしょう。これは大變なことを福沢は言っているわけです。ですから、上手く運ばないならば、「今年今月後藤消滅シタリ、誠ニ惜シム可シ」。もしここで後藤が消滅するんだつたら何と残念なことではないか、と。

そして次に「炭礦社ノ事五月蠅ト雖トモ」、いろいろな形でずいぶんうるさいことがいろいろとある。だけでも「之ヲ合併シタラバ」、つまり三菱が手に入れたならば「両社長ノ友誼ヲ全フスルノミナラズ、天下國家ノ一大美事。嗚呼明治十二年冬ノ時ニ、三菱社長ノ一諾ヲ得タラバ、斯ル苦々シキ事態ヲ目撃スルコトモアラマジモノヲト」、そして「窃ニ公ノ為ニ不平ヲ抱カサルヲ得ズ」。ここでもまた「直ニ老台ニ向テ怨言ヲ呈セサルモ、窃ニ公ノ為ニ不平ヲ抱カサルヲ得ズ」。こんなに何度も何度も、言ってみると煽てて、すかして、そして

あらゆる言辭、美辭ということを惜しまないで、心底から天下国家のために、どうか弥太郎さんよ決断してくれ、と。これは『書簡集』の中でも白眉とも言うべきいい書簡なのではないでしょうか。恐らく福沢の心情吐露の書簡を代表すべきもののように感じました。

だけれども、この経緯を見てみますと、弥太郎は、後藤は明治維新以来の友人であり、しかも自分の弟の奥さんが後藤の娘であるという縁戚関係ですけれども、弥太郎は企業人として極めて冷静に対処していたことが、その後の動きから推察することができます。そういったことは伝記や『三菱社誌』のいろんな所に出ているわけですから、やはり大した見識の持ち主であるということを我々は見て取ることができます。

福沢の画策

そして、まだまだ弥太郎の答えは得ていないのですが、やがて十一月五日付の（5）^{四二}の石川七財宛書簡、あるいは山東直砥宛書簡等々を通じて福沢は具体的に、この譲渡が成功するよう働きかけています。

石川七財は、弥太郎より六歳年上で、同郷の土佐出身であります。そして石川は早くも一八七〇（明治三）年に土佐藩の出先である大阪商會に關係して、藩命を帯びて上阪したときに弥太郎と親しくなるわけです。弥太郎は石川を非常に欽待して、その協力を求める。つまり、この人物はできる。自分より六歳上ではあるけれども弥太郎は石川に惚れ込むわけです。そして、弥太郎の人物と時世観といえますか、近代化を目指す見識に石川は共鳴して、直ちに藩の役人の職をなげうって弥太郎の九十九商會に入社して、弥太郎の有力なブレーンの一人になります。

そういう石川に対して、福沢が働きかける。弥太郎と面談したのが十月二十八日でしたから、それからちょうど一週間ぐらいたった後の十一月五日付で石川に手紙を出したのが(5) 四二です。

「拝見仕候。今朝ハ態々御来訪被下」、今朝、石川がやってきて、いろいろと話したという形で具体的なことがここから動き出すわけです。しかし、「且又万々一も今度之秘事、夢斗リニも在崎之者——長崎、高島炭鉱——の耳ニ入りてハ、意外の後患を醸し可申」。

つまり隠密裏にまさに水面下で、深く、深く、この交渉をしていくのだ、どうか石川さんよ、慎重な形でその仲介の労を万々ゆるがせないようにしてください。当時の弥太郎、あるいは後藤象二郎の動きなどを勘案して、こういうふうにして記すわけです。

このような手紙を石川に出したのですから、この手紙を受け取った石川は即日に湯島の弥太郎にこの手紙を転送します。ただ福沢の手紙を受け取っておくのではなくて、福沢からこうこういうような内容の手紙が来ましたよと、即日に弥太郎に転送しているのです。

(6) 四七の書簡で、やがて年が明けた一八八〇(明治十三)年三月一日付の山東直砥宛の手紙でいよいよ具体的に becoming することがわかります。

「其後度々吉田君——関係者です——にも面会、二月廿日ニモ後藤先生之別宅へ参り色々之談話。訴訟も次第二進歩候得共、中々埒明不申」。後藤のほうの訴訟等々というように何がと障害になって困っているというような形で、高島炭鉱について思うところを述べて、小杉という者を推薦しています。この書簡はそういう経緯の一端を示しているわけです。

やがて四月になって更に山東に宛てた十日付の手紙が(7) 四六です。

「昨日小岩拙宅に参り」、「小岩」すなわち弟の弥之助が福沢の所に來た。「先方の様子先づ上首尾と申て可ならむ」。先方の様子、これはトップである弥太郎も前向きに考えている。「唯此上は大岩——弥太郎——の決心如何に在るのみ。是も一週日若しくは十日の内にあるべし。扱此事成るとすれば第一、二着の仕事は藤氏東歸、後藤が帰ってきたとき、「内債の処置に着手不致ては不叶」、やはりいろいろの問題もクリアしなくてはならないという形で、「大岩の一決を御承知の上に被遊度」と、その背景のことを言っておくわけです。そして一番最後の所で「斯くまでに相成候上は、今後の一大要訣は事を秘するに在るのみ。今日にても顯れては破れ可申、誠に恐ろしき事に御座候」と、露顯、つまりこれが世情に漏れることを非常に警戒した福沢は、この但書のような形で秘密裏に事を運ぶようにと注意するのです。裏では、いわば着々と進んでいるということでもあります。

弥太郎を熱心に口説く

そしてついに、五月七日付の弥之助宛書簡が（8）四七です。

「要用 今朝湯島へ拝趨」、福沢が、「今朝湯島へ」ということは、弥太郎の邸へ行ってきた。「寛々拝眉二時間計御話之上引取申候」。二時間ほど会って話をして、そして帰ってきたというんです。つまり「其大意ハ、兼而仁兄之御内話ニ奉伺候通りノ事ニ而、別ニ是ト申スヲバスタクルモ無之」、つまり、支障も何もない。「唯々大事急ニ決シ難シ」。「大事決シ難シ」ということは、弥太郎がすぐさま動かないで非常に慎重である。「去迎之ヲ捨ル之意ナシ」。かといって、ないことにしてくれとは弥太郎は言っていない。「日一日以テ今日マ

テニ及ヒシトノ御事」。そういうわけのいろいろとここまで来てしまったと、弥太郎が言っていた。「誠ニ御尤千万之御儀、私モ懇々丹心ヲ吐露シテ、是非共必ス至急ニト申上置候儀ニ御座候」。できるだけ早くこの譲渡問題を成就して下さいと自分は「丹心ヲ吐露」して、熱心に言いましたよと、福沢は弥之助に伝えています。

そして、「誠ニ後藤先生之為ノミナラズ、間接ニハ菱社——三菱——ノ損亡ノミ。何卒御含置奉願候」という言い方で、先程の双方にとっての宝、即ち、再三にわたる福沢の意思がこういったところに表れているわけです。

そして、ついに五月の初夏になった頃に、福沢が五月十四日付で弥太郎に手紙を出しているのが（9）四六です。

「初夏之新緑衆人ニ可なり。益御清安奉拝賀候。先日ハ早朝（等カ）ヲ拝趨」。この「先日ハ早朝ヲ拝趨」というのは（8）の手紙の内容です。ご多用のところ話したことのお礼です。「逐一御心事之所在を詳ニせざるハなし。其節も愚意申上候通り、若しも他ニ斯の如き場合事あらハ、老生ハ強而御留メ申上候積り。併此度之事ハ、固ク商売之利益ニあらず、交際之計略ニあらず、唯人類之本心ニ存する故旧朋友之親ニ出たるもの、ミ。何卒深く御勘考を奉願候」。これはすごいことを言っています。つまり「商売之利益ニあらず、交際之計略ニあらず、唯人類之本心ニ存する故旧朋友之親ニ出たるもの」、「故旧朋友之親」、福沢は、心から情宜を尽くして、まさに格言として使えそうな言葉で、非常に強く決断を要請しています。

しかし、「河田君御東帰之報告甚タ宜敷よし」、でも実際は実業人ですから大変大きなお金が動くので、三菱側ではこの間にいろいろと、盛んに各方面から調査していることがわかります。

そのあとに、「全体後藤君之天稟、果して善く商売之事ニ適するか、決して然らず」。つまり、彼は実業家と

しては駄目で、「老生尚且之を信せず、況や老台ニ於而をや」。後藤は実業というか、商人には向いていないだろう。そんなことはあなたも知っていることではないかと、こう言うんです。しかし、「高島の炭坑を、天然之利あるものとするも、之を後藤先生之手ニ附するときハ、其利を尽すこと能はず。貴社ニ附すれば其利之本色を顕はすを得べし。老生之頑固ニ信する所なり。何卒御英断被下度奉願候」。つまり、これは大変な口説き落として、とにかく英断をということは、福沢も結局、高島の石炭の良質なることを見抜いていたと言っていると思います。「天然之利あるものとするも、之を後藤先生之手ニ附する」と、結局は宝の持ち腐れだけれども、この良質の炭坑を三菱が手に入れたならば大飛躍するだろう。そういうことを微に入り細に入り説いて、重ねて弥太郎に強く決断を訴えているのです。そして最後に、「何分ニも此度之一事ハ老台畢生之一大災難ト被思召、御決行奉願候」。あなたにとつて、この一生涯で一番の大災難だと思つて決断してください、と。ここまで言っている。災難だからどうか引き受けてくれと言うのですから、これはすごい口説き文句ですね。ここまで言うということは、やっぱり書簡でなければ、こういう心情はなかなか出ないです。こういう辺りがこの度の『書簡集』の中の大変面白いというか、我々、歴史をやっている者は、こういうところで、ああこういう形で人と人との触れ合いがあり、そしてこうやって歴史が動いていくんだなと、書簡を通じてわかるわけです。

大隈への働きかけ

そして、五月十五日付の石川七財宛の（10）^四 究の書簡を経て進展していくのですが、（11）^四 器に行つて、

六月五日付の弥之助宛の書簡。これは六月です。

「昨朝ハ推参御妨仕候。其節御内話之一条、何分性急、今日大隈ニ参り内談候処」、高島買収の件を当時参議であつた大隈重信に——大隈はこの年の二月までは大藏卿だったのですが、卿と参議を分離することになつて、このときには参議専任です——つまり政府の重鎮の大隈に内談した。「中ニコンプリケート之意味アリ」。複雑な意味があるという言い方で、大隈の動きもいろいろと探っている。

「就而ハ昨今貴社長ニ切迫之御催促ハ、少シク御見合被下度」、大隈と会談したところ、どうも、事を性急に進めないでちよつとここで速度を緩めよう、と。この辺で一時休止ではないけれども、政府等の動きを見ると、ここでスローダウンというか、性急さをちよつと控えようというわけです。

そういうようなことが（12）四三の六月十九日付の弥之助宛の書簡にも更にこう書かれているわけです。

「長崎ヨリ之電信拝見」、つまり、後藤の弥之助宛電報を見せてもらっていたわけで、これを弥之助に返却したときの書簡が（12）です。「本月廿三日午後雉子橋へ参ル約束ナリ。成敗ハ大抵此一挙ニ而相分り可申哉ニ被存候」。六月二十三日、つまりあと四日後に自分は雉子橋へ行く。そういう約束だ。「雉子橋」というのは大隈の屋敷です。大隈の所に行つて、政府、つまり大隈らの意見がほぼここで承ることができだろう。だから「成敗ハ大抵此一挙ニ而相分り可申哉ニ被存候」と。こちらの動きを示しているのです。

福沢は、言ってみると、石川とか莊田らを通じて、そして後藤の婿殿である弥之助を通じて、弥太郎の最終的な決断を探っているわけです。政府のほうも三菱のほうもと、いろんな形でアンテナを張つて福沢は動くわけです。

そして、その結果が、約束通り六月二十三日に福沢が大隈と会った。その結果を（13）四三の六月二十四日

付の弥之助宛の手紙が記しています。

「昨午後約束之如く会合、百事都合宜し」。「昨午後」というのは雉子橋の大隈邸に赴き面談したということの意味します。「百事都合宜し」ということは、政府部内のほうでも、そのトップである大隈の、いわば非常にいい感触を得たということです。「唯即席ニ決する能はず」、すぐさま事を決しては駄目だ。「石川は東が、河田は西より」、いわば腹心の人たちが帰って来て、その上で慎重に熟談をして対処したいのだということです。

「この度こそ成敗之決する所なり。毫も御怠慢無之様奉祈候」。もうここまで来たんだから、何とかして怠慢のないように事を円滑に運びたいものだ。どうかゆめゆめそういうことを忘れないようにという、福沢の微に入り細に入った助言です。

弥太郎の決断は「近年之一大快事」

そして、いよいよ(14) 翌日の七月六日付の弥太郎に与えた手紙です。

「陳ハ昨日も——七月五日です——石河^(四)両君拙宅へ御出相成、彼ノ一条——高島の譲渡問題——遂ニ御断行との吉報を得たり」。つまり、弥太郎が決断したという、その決断の結論を石川、河田^(四)が福沢の所に、朗報を持ってきたわけです。ですから「御断行との吉報を得たり。誠ニ近年之一大快事、小生之喜悦ハ之を筆端ニ尽し難し」。非常に喜んで、近年の一大快事だ、何と美拳ではないか、と。「実を申せハ、生之身ニ於テ本来他人之事なれ共、中々様ニ不参」。他人の事だけれども、私はちよっかいを出さざるを得ない。先程の手紙の延

長にあるわけです。そういうわけで、この吉報を非常に喜んでいるということを、お礼を込めて弥太郎にまず報知したというのがこの(14)の書簡です。

そして、弥之助に対しても、同じ日の日付で(15) 四二の書簡を出しています。「昨日ハ御来訪被下候由」、石川と川田が弥太郎の決断を伝えに來た、その日に弥之助も、やはり同じことを福沢邸に報告に來たわけですから、ところが、「扱彼ノ一条モ遂ニ好結果ニ至リ、誠々何トモ申様無之、近年之一大快事。実ハ昨日石河^(四)君拙宅ヨリ御歸リ跡ニテ」、同じ事を兩人ももたらしてくれた。だから非常に嬉しいので「即刻長崎へ電報之為メ」、電報するために福沢はちょっと家を留守にした。その留守をしているときに、弥之助さん、あなたが來てくれたんだよということなんです。そして、後藤が「御歸之上ハ尚篤ト御相談イタシ候事モアリ、又道德上ノ御約束致度事モアリ。其辺之義ニ付而ハ」云々、会ったときにしたい、と。

そして次に「明治十一年十月十二日ヨリ十三年七月五日マデ、一年ト九ヶ月ニ而、遂ニ事之成ルヲ見タリ」。明治十一(一八七八)年から自分はこの事を耳にして動き出した。だけど一年間ぐらいはほとんど進展がなかった。そして十二年の秋からこの十三年の七月まで、通算するならば一年と九ヵ月、自分はこの事について非常に心を痛めて、そして微力を尽くしてきた。それが七月五日の弥太郎の決断という形でようやく実を結んだ。「実ニ愉快ニ不堪候。唯此上ニモ一大事ハ極秘極密之一点ナリ」。しかし、まだまだ水面下で事を運び、公表なんてとんでもないことで、ちゃんと契約書を交わすまでは隠密裏に行動しなくてはならない、ということ。弥之助に非常に強く助言しています。弥太郎の買収に関する最終の決意というものを心から喜ぶと共に、隠密裏に行動すべきことを非常に強く要請しているわけです。

(16) 四二の七月七日付の弥之助宛書簡には、「電信ハ都而暗号ニ而、」というような非常に周到な姿勢で、電

信も暗号でやり取りするというような形で山東の動きなども見ているわけです。

この中で、後藤が上京してくる。後藤の動静等も伝えているのが(17) 四五の七月十日付の弥太郎宛書簡です。

やがて(18) 五四の手紙、政府のトップである大隈に対して十一月二十四日付で高島炭鉱の収益の内、洋銀を確保するように注意を促しています。日本の紙幣でやり取りするのではなくて、あくまでも洋銀を確保するようにと、政府としてはその辺の事を十分に注意して下さい、というようなことをアドバイスしているんです。

ところが(19) 五二の書簡になりますと、川田小一郎に与えた十二月七日付の手紙ですが、

「陳ハ今朝不容易事ヲ承候。其事ハ他ナシ、彼ノ炭坑之一大策ヲ、薄々人之噂スル者アルガ如シ」。非常に秘密裏に譲渡する話が進んでいるのだけれども、どうも情報が漏れているようだ。誰が漏らしているのかはわからないけれども、と二、三の名を挙げて、とにかく漏れてきているから注意してくれということです。いろいろと売炭の顧客の問題とか、値段の問題。そういったことで炭坑で現に働いている人たちからの人気を落とさないように、そういう状況を見ながら、福沢はなかなか巧妙です。漏れてきているから、三菱と実際にはまだ契約をしていない後藤との間に、つまり三菱と炭坑側とが外面的にトラブルがあるというようなことを世間にふれ回せということです。買収話が進んでいるという、そういったことが漏れているので、どうか、そういうことを否定するために山東と共に前後策を考えて、三菱と高島炭鉱との間には軋轢があるんだ、ということを出演するんです。そういうことを微に入り細にわたって助言をしている。これは一種のヤラセです。そういう形でこの譲渡話というものをカモフラージュする。福沢の非常に用意周到なる動きというのがここに見てとれま

す。

さらに、今度は年が明けて一八八一（明治十四）年に入り、一月十六日付で石川七財に宛てた書簡が（20）
頁三です。

まだ正式調印していないわけですが、後藤が非常に窮状している、非常に追い詰められている、そういう後藤の窮状を知らせると同時に、買収を急ぐように要請したのがこの書簡です。「既ニ本日モ藤君——後藤——ヨリノ来状、一日三秋実ニ待兼ルトノ文言」、とにかく早く自分たちを救ってくれと、このように矢のように催促が来ているんだ、そういう情況だから、買収を急ぐように福沢は石川のほうをせっついたわけです。

そして、この後に、実はこれは福沢書簡ではないのですが（23）（24）の資料と書簡があります。

どういう事態が出てきたかというのが（23）の「高島炭坑譲渡約定副書」（『三菱社誌』9収録）です。つまり、買収を急ぎます。その結果、遂に春の三月一日付を以て高島炭鉱の譲渡の約定が出来上がるんです。大きな山場を迎えるわけです。後藤と弥太郎の連名で、「三月一日附ヲ以後藤象二郎ト岩崎弥太郎ノ間ニ取結ヒタル高島炭坑譲渡約定書ニ基キ」云々と、『三菱社誌』の第九巻には非常に細かく、取り決めが記されている。三月一日付で約定書が成るのです。

譲渡の契約が約六十万円以内、あと政府に対して差し出す二十数万円が加わります。そして、岩崎が後藤に月々一千円ずつ与えるということがここで取り交わされるわけです。ですから一応三月一日付で決着がつくのです。

弥太郎の大激怒

(24) の三月十八日付で弥太郎が弥之助・石川七財宛に出した書簡(『三菱社誌』9収録)によると、ここで新たな問題が出てきたことがわかります。弥太郎が弟の弥之助と石川七財、つまり三菱の大幹部に与えた手紙です。三月一日に約定書を交わしたわけですが、ところが十八日、それから三週間もたたない後にこの手紙です。

「手紙並浅田^{文〇正}ヨリ委細申越之主意ハ致承知候過日出発之際英一ト——イギリス一番館、ジャーディ・マデysonと——後藤象二郎^{マヤ}約條^{マヤ}壺^{マヤ}年六万噸之事ハ初而承知致シ」、共同経営の後藤と英一番のジャーディ・マデysonとの間にそのような契約があつたのは初めて承知致した。また、グラバーとの約定も初めて承知。「是等ハ最初ヨリ後藤象二郎ハ我ニ向カツテ聊モ無之旨申立居シ也」。今まではそんなことはないと後藤は言っていた。こんなことは自分は承知していない。「今日之報告ニ又々九千円之相違云々誠不快事ニ候」。今までの計算に比べてまた九千円も余分にお金が必要ではないか。「誠不快事ニ候抑右高島談判之初ヨリノ手続ヲ考案セヨ我等六十万ヲ以悉皆」、六十万円で全て悉く「高島負債ヲ——後藤の負債を——引受ル心得ハ右事業ニ属スル物品ハ大小一切合六十万金額ニ込リ居候筈ナリ」。それなのにこの度、違うことが新たに自分に報知された。「物之高ニ仕立四万九千余之追送負債高ヲ増加シ六万噸並「ガラハ」等之條約有之ヲカクシ置キ其上又々九千円云々実ニ言語ニ絶候次第ナリ」。こんなことは新しい事実でみんな初めて聞く事だ、こんなにまだまだ金が必要なのか、と怒っているわけです。

「実ニ言語ニ絶候次第ナリ畢竟右様之手段ハ象二郎兼而英一ヲ引込ム時之策略ト同一ナリ」、かつてイギリス一番ジャーディ・マディソンと提携したときと同じようなやり方をまた象二郎はやっている、と怒っているわけで、「我其手段ヲ了知ス」、かつてのそういう後藤の手口を自分は知っているんだ、と言うのです。「後藤象二郎へハ何ニモ面倒ヲ不聞セ何故我杜へ引取」、弥之助、石川よ、お前たちは何で我が杜へ後藤のことを引き取り「貴様共心配致候や」、何でお前たちが後藤のことで躍起になるんだ、「不審第一ナリ」と詰問しているのです。「勿論一旦象二郎へ向ケ六十万迄ナレハ引受助救可致旨申談候へ共其件々前之不都合発顕シテ」、前のいろいろな不都合がまた新たに顕れてきたのでは、「我ニ於而聊モ象二郎ヲ助ケル心無之候試ニ思へ象二郎之コマカシノ件々我ニ於テ尻ヲヌグヒ象二郎へハ月々弐千五百円之大金ヲ我ヨリ与へ立派ナル殿様ニ仕立置クヘキ道理無之候象二郎へハ有リ之儘我之主意ヲ以テ詳細ニ申談セヨ」。自分がこれだけ怒っているということを詳細に後藤に、お前たちは伝えろ。そういう内容なんです。そして、「我ヨリ違約スルニ非ス」、自分たちが約束違反したのではない。「象二郎我ヲコマカシ我ヲ愚弄セントスル之心得ハ我ニ於而モ千万不面白ナリ必貴様共——弥之助、そして七財よ——引取而象二郎之苦勞ヲ我杜へ持込我等ニ苦勞ヲ向々不掛様注意肝要ナリ」。

そして「象二郎之心底確實憐助ヲ乞之意アラハ」、本当に助けてくれという、そういう気持ちがあるならば、「象二郎自ラ來テ我ニ談スヘシ我其節何分之報答致スヘシ」。このように言って大激怒してしまっわけです。話がまとまったのにまだまだ借金がだんだん増えていたことが判明したからです。

三月十八日付で弥太郎からこれほどの逆鱗に触れた手紙をもらった弥之助と七財。こういう事態になりますと、そのことが福沢にも当然もたらされてくるわけでありす。

大隈への「御一声」願い

福沢としても動かざるを得なくなってくる。その結果即座に、翌日動いたのが大隈宛の三月十九日付の
(21) 吾兄書簡です。

弥太郎が激怒している様子を福沢は大隈に報知して、何とかこれをうまく解決させたいとして出したものです。

「爰ニ一要事申上候。高島之一条既ニ三菱ノ長崎へ委員派出、授受将ニ成ラントスル其時ニ、少しく故障を生シタリ」。これだけいろんな負債がまだまだ出てきた。故障が出てきた。「最初之約束六十万。是ニ而一切取片付之積之処」、いろいろとまた問題が出てきた。1、2、3という形でそういう理由を列挙しています。

そして「右三条之間違ニ而、三菱社長甚タ不満之様子」、弥太郎が怒っている。そして「旁以弥之助ハ実ニ大心配。既ニ今朝拙宅へ参リ」、弥之助が非常に困って福沢を訪ねてきて、兄の激怒を買ってしまったことを伝えたわけです。ですから「或ハ破談も難計杯不怪話ニ御座候」。ここで立ち消えになっては大変困る。だから大隈さんよ、動いてくださいという、大隈に対する最後の手段とも言うべき手紙です。

「就而小生之所思ニ而も、此大物授受之際ニ、三万五万之違算ハ固々あるべき事なり」、三万円とか五万円、そんなことは当然予想されることではないか、と。「実ハ最初六十万ト漠然タル題を出して」、六十万円ぐらいだったけれども、いろいろと問題が出てきた。「今日此場合ニ臨て、何ソ細々論スルヲ須ヒン」。こういうようなことはよくあるけれども、もうここまで来たんだからこう行くしかない。

「右之次第第二付、誠ニ恐入候得共、今日小野義信^義ニ而も至急御呼寄セ」、小野義真というのは大隈の、いわばブレーンの一人であって、義理の弟が小野梓です。小野梓は大隈のブレーン中のブレーンです。小野義真を呼んで「炭坑授受ニ付何か議論あるよし福沢ヲ承りたれ共、結局些細之事デハナイカ。此場合ニ臨テ何ヲグズ／＼云フカ。片時モ早ク片付ケロと」、大隈さん、あなた、そう言ってくださいと、大隈の言葉まで用意するわけです。

そして「唯御一声相願度」。大隈さん一言、そういうふうにして事を進めると、命じてください。「然ルトキハ、小野ハ必ス其御説論ノ趣ヲ熱海ヘ報シ」、弥太郎が熱海で湯治をしていますので、その湯治をしている熱海へ報じたならば、「事立処ニ整頓いたし候儀ニ可有之」、「小論大事ヲ破ルノ恐ニ不堪」という言葉で、結局は大隈の「御一声」という動きにおいて、遂にこの譲渡というものが成り立つに至るのです。

結局どういう形で片が付くかというと、『三菱社誌』収録の資料によれば、六十万円が大変大きな額になって、最終的には総額一切合切九十七万六千六百十四円六十六銭五厘です。大変大きなツケを背負うことになったわけです。大隈の「鶴の一声」といいますか、政府がこれを大いに支援するという形で、一件落着となったのであります。

結局は、結論としては三菱が海から陸へ飛躍する。そして「高島炭鉱」が「三菱」の手に帰することによって、わずか数年で「ドル箱」事業に進展する。海運業から幅広い事業への飛躍の端緒が、後藤から高島を譲渡されたこと、これが実は大きな梃子になっている。この時に、極めて多大なる仲介の労をとったのが福沢であったということだ。

各社の炭鉱というものは、後に財閥を形成する三井でも、あるいは住友でも、あるいは古河でも、みんな地下資源というところから財閥形成の、いわば大きな出発点になっております。その中でもとりわけ高島炭鉱の石炭は「其炭質ノ良好ナル本邦中第一二位シ内外人の普ク知ル所タリ」と言われて、非常に上質でありました。実はこのことが日本の大きな産業革命といえますか——つまり日本の産業革命というのは、地下資源の乏しいなかで、銅と石炭と生糸——糸だけではなくて繊維産業ということを指すわけですが——銅と石炭と生糸というものが日本の産業革命の最も大きな前提になっています。この三品目が、実は外貨を獲得する最大のモノだったんです。ですから、これを掘れ、掘れ、繊維産業の女工さん、働け、働けと言うと、どうしてもそこに労務管理の荒っぽいことが出てきます。ですから、三菱にはこの後、有名な明治前期の最大の労働問題の高島炭鉱坑夫虐待事件のような問題まで出てくるのですが、それはまた後日談ということです。

そういう形で、銅と石炭と生糸の動向というのを見るときに、実は石炭の動向の裏面に、このような福沢の大きな働きがあったということです。

レンズをくれた『福澤諭吉書簡集』

書簡を見ますと、福沢の文体とか、レトリックの妙味などをこのわずか二十一通ぐらいの書簡の中からも、我々は味わうことができる。それは坂井先生はじめ、この『書簡集』の編纂に当たった方々が福沢の肉声でできるだけ再現するというような手法をとられたために、それが非常にビビッドに伝わってきているような気がします。

自己の志を遂げようとする際、最大限の心情を吐露する福沢の姿勢というものが、とりわけ（４）とか（９）の書簡に溢れるほど出ている。こうした内容が人の心を打つんです。書簡の宛先の人物と福沢との長年の、あるいは親疎というものがあるにせよ、非常に親しい人、大いにその人を認めている関係のある人。そういう人と人との心理空間の共有性というようなものが、実は人を動かしていくような気がします。普通の論説よりも心情が一番わかりやすいのは書簡ではないか。こういうわずか二十一通の書簡からも福沢の人となりというものを垣間見ることができないのではないか。この度の膨大な『書簡集』の中から、一つの事件というようなものを幾つも我々は解明できる。書簡を読み込むことによって福沢像を——と言うよりも福沢を通じた日本の近代化、あるいは政治とか、思想というものを——より一層鮮明化できる。そういうたくさんのレンズといえますか、眼鏡を頂戴したような気が『書簡集』から感じたわけです。

雑駁でございました。どうもご無礼いたしました。

（さとう よしまる 早稲田大学講師）